

新歲時記

虛子編

增訂版

三省堂發行

(増訂歳時記)

新歳時記

増訂版

定價 貳千六百圓

一九四四年(昭和十九年)十二月五日 初版發行

一九四〇年(昭和十五年)四月十日 改訂版發行

一九三五年(昭和十年)十月十日 増訂初版發行

一九二九年(昭和四年)五月一日 増訂四版發行

著者 高濱 虛子

發行者 株式會社 三省堂

代表者 上野 久徳

株式會社 三省堂

東京都千代田區三崎町二丁目二十二番十四號

發行所

電話 編集(〇三)三〇九四二

販賣(〇三)三〇九四二

總務(〇三)三〇九五二

振替口座 東京 六五四三〇〇

不許複製(落丁・亂丁本はお取り替へいたします。)



Printed in Japan

序

一言にしていへば文學的な作句本位の歳時記を作るのが目的であつたのであるが、季題に就て多少の考もあつた所から其點を明かにして一般の注意を喚起したい心持もあり、從來の形式に囚はれない革新的な意圖も少しはあつたのである。以下其等の點について少しく述べてみたいと思ふ。

季題の取捨 季題は俳句の根本要素であるが、既刊の歳時記を見るに唯集むることが目的で選擇といふことに意が注いでなく、世上一般の字書の顰に倣ふことが急で作句者の活用に供するといふ用意が缺けてをつたかと思ふ。例へば春の風・春の水・春曉・春晝等があるから對蹠的に夏の風・夏の水・秋の朝・秋の晝等もなければならぬとして其等の題を設けたり、二十四氣や七十二候も氣候であるからとして之を入れたり、外國の記念日やあらゆる神社の祭禮等を選択なく取入れたり、季題だけで十三四字甚しいのは十七字を超過するものがあつたり、これ等は季はあるには相違ないが俳句の季題としては不適當なものである。本書は季題の取捨に最も

重きを置いたが其方針としては、

俳句の季題として詩あるものを採り、然らざるものは捨てる。

現在行はれてゐるゐないに不拘、詩として諷詠するに足る季題は入れる。

世間では重きをなさぬ行事の題でも詩趣あるものは取る。

語調の悪いものや感じの悪いもの、冗長で作句に不便なものは改め或は捨てる。

選集に入選して居る類の題でも季題として重要でないものは削り、新題も詩題とするに足るものは採擇する。

等で、要は文學的に存置の價值如何にある。諺に惡貨現れて良貨影をひそむといふことのある通り、季題も玉石混淆しては佳題も目立たず、一々其選擇の煩累に堪へないであらう。實に季題の整理といふことが此の歳時記の一つの目的であつた。其捨てた季題は別に掲げて取捨の跡を明かにする考へであつたが紙數の關係等もあり實現しなかつた。

尙以前私が「寫生を目的とする季寄せ」といふ小冊子を編むだ時、紙數の都合で類似の題を或題下に傍題として掲げたのに因を發したものが、爾來多くの歳時記に此の傍題が盛に行はる

るやうになつたが之も取捨選擇が必要である。本書には從來傍題として取扱はれ來つたものも一題にする價值のあるものは全部獨立せしめた。

四季の區別

春は鶯が鳴き木の芽が出で花が

咲く氣候溫暖な時、夏は草木が繁茂し最も暑い時、秋は草木が紅葉し氣澄み收穫の季、冬は最も寒く草木は枯れ蕭條たるの季といふやうに春夏秋冬は觀念上のものであつて、昔から其分け方がいろいろになつてをるのである。西洋の春分・夏至・秋分・冬至を各季の始めとする分け方は暫く別とするも、陰曆二・三・四月を春とする時候上からの分け方、陰曆正・二・三月を春とする行事上からの分け方等があり、又、陰陽五行説による立春・立夏・立秋・立冬を各季の始めとする分け方もある。現在學校教科書や氣象、統計等は陽曆三・四・五月を春とする分け方であるが、これ等は何れも便宜上極めたものである。俳句では右の内陰陽五行説のものを採用し、月でいふ場合は其多數が所屬してをる二・三・四月を春、五・六・七月を夏、八・九・十月を秋、十一・十二・一月を冬とするのである。この五行説は北支那を中心として極めたものであるさうだ

が我國にもよくあてはまり、感じを主とする俳句に最も適してをるのである。昔陰暦が行はれてゐた時代も俳句では新年正月からが春で、彌生盡・九月盡を春秋の終りに置いた區分の仕方は現今陽暦を用ゐて大體一ヶ月遅れとなつてゐるのと季節が合致してをる。

季の決定 季題の決定も亦俳句では重要な事柄で、從來の歲時記にも相當顧慮されてをるやうであるが季の定め方が各書甚まちまちで全面的に信賴すべきものが無い。現在は行事等も地方に依つて陽暦の處と陰暦で行ふ向とあつて區分上不都合なことも尠くなく俳句ではどうしても何れの季にか一定せなければならぬ。本書は季を決定するについてはあくまで文學的見地から季題個々について事實・感じ・傳統等の重きを爲すものに從つて決定した。中には理窟上をかしいものもあり事實と違つてをるものもある。例へば牡丹より藤は遅いに不拘、牡丹を夏とし藤を春とし、菊の盛りは立冬頃であるのに殘菊を秋とし、朝顔・木槿は夏から咲き、西瓜・蜻蛉等も寧ろ夏が多いのに秋とし、七夕は陽暦では夏であるのに陰暦の一月遅れとして秋とし、端午も陽暦でするので立夏前であるのに夏とした

如きで、是等は其季題に對する感じが重きを爲したものである。又、新舊曆の關係は古人の忌日は陰曆の季節と離し難いものもあるので大體に於て陰曆を用ゐ、其他は主に陽曆としたが、實際行はれてゐなかつたり感じの上などで之にも多くの例外がある。

新年は子規以來四季の外に區別せられる例であつたが本書は冬の一行事として取扱ふことにした。

季題の排列 季題を時候・天文・地理・人事・動物・植物等に分類することは古來にも類似のものはあつたが斯る分類法は子規をはじめとするもので、爾來この季題排列法は殆ど慣例のやうに歲時記に踏襲され來つたのであるが、之は畢竟索引上の便宜が主となるもので作句上には何の必要もなく寧ろ甚不便なものである。例へば麥を見るのに麥（植物）、麥の秋（時候）、麥刈・麥打（人事）として諸所に分散し、蠶といへば多く蠶飼の句を作り、海苔といへば海苔搔・海苔舟などが多く詠ぜられるのに態々分離して動物と人事とに分るゝ等の類である。其許りでなく其時々に従つて題を探らんとするに、天文・地理等に別れてをる爲に頗る不便を感じるので

ある。されば本書は全部これ等の區分を撤廢し、季節の推移するまゝに月を逐うて排列する新形式によることにした。月別にすることも新舊曆の相違や土地に依つての遲速、或は二ヶ月・三ヶ月に互る季題がある等、嚴密な排列は容易でないが使用に便するといふことを目的として裁定した。

季題の排列は大體東京を中心とし、月の中でも其遲速に應じ且つ出來得る限り相關聯するものや類似のものを竝べた。然し之も幾多の例外があつて師走が一月に入れ難いため霜月と共に十二月にあつたり、蕪村忌も陽曆に直せば一月であるがそれもをかしいので十二月に置いた。尙排列方の一例を擧ぐれば、雁は來る時多く見る故雁來ると雁とは一所に置き、同じ渡り鳥でも、鴨はいつ來たか判らず居るところが目につくから冬に置いた。稻は稻刈とは時季が違ひ、木の實は落ちるものと落ちないもので時期が違ひ、又花は盛りの時を採るものと咲きそめる頃が印象深いものがある。一季を通じたものは其最も感じの強調される季節を選んだ。

解説 簡單にして要を得るといふ信條の下に博物的な敘述を避け事實に卽し句作上必要な

ことに止めた。

例 句 例句は初心者の方針ともなり歳時記の實際的價值を左右する一つであるから其選定に重きを置いた。

以上意を傳ふるために多少くだしく述べ過ぎたやうであるが、要するに本書は季題の選擇を主とし且つ作句本位の最も便利な歳時記を作るのを目的としたものである。

尙本書は他日更に校訂して一層完全を期し度いと思つてをる。

本書を編纂するに當りて、松藤夏山・宇津木未曾二君等の力を得ることが頗る多かつたこと、又井手原太郎君の事務、筆寫等の煩勞を執られたことをこゝに深謝する。

昭和九年十月九日

高 濱 虚 子

附 記

卷末の季題分類索引は久しく慣行されて來たものを急に廢することは不便を感じしむるであらうとの三省堂の發意によつて添附することになつたのである。

改版に際して

三省堂から、あまり澤山版を重ねたから改版したい、それに就ては増補訂正する處があれば此際にして貰ひたい、といふことであつたので、訂正すべき二三の季題、竝に熱帯の氣候・動植物・人事等のうちで已に夏季に屬するものとして諷詠し來つたものを増補し、例句も千餘句は殖やしたことになる。それは主にホトトギス雜詠選集春の部に採録した句である。

増補改版する機會はまた其うち來ることもあるであらう。其時分にはホトトギス雜詠選集夏の部以下も選了してゐるであらうから更に増補することにならう。其他今回は匆卒のことであつて手の及ばなかつた箇所にも訂正の手を伸ばし度いと思ふ。

今回はさきに協力をして貰つた松藤夏山君は已に亡く、主として井手原太郎君の助力に俟つたことを附記して置く。

昭和十四年八月三十一日

ホトトギス發行所にて

高濱 虚子

再改版に際して

三省堂から又版が磨滅したから改版し度い、序でに季題其他に訂正すべきところがあらば訂正し度いとの話があつたので多少訂正した。曩きに加へた熱帶季題の類は省いた。又例句にホトトギス雜詠選集夏の部以下を(春の部も多少)加へた。

今回は眞下喜太郎、星野吉人兩君の助力に俟つところが多かつた。

昭和二十六年一月一日

鎌倉草庵にて

高濱 虚子

目次

冬

(十一月・十二月
は巻末にあり)

一：
月：

一 去年今年月
新 年
元 日
元 朝
初 鷄
初 鴉
初 雀
初 明
初 日
初 空
初 富
初 風

三 三 四 四 五 五 五 五 五 六 六 六

御 降 若 水 初 手 乘 初 白 朮 詣 破 魔 弓 歲 德 神 惠 方 詣 七 福 神 詣 延 壽 祭 四 方 拜 朝 賀 年 賀 御 慶 禮 者 禮 受 名 刺 受 禮 帳 年 玉 賀 狀

六 七 七 七 七 八 八 八 九 九 九 九 九 九 一 一 一 一 一 一 二

春 福 福 穗 野^と 樑^{ゆづりは} 齒 蓬 鏡 飾 注 飾 門 切 數 ご 食 齒 太 雜 年 屠 大 初 初 初 初
著 藁 壽 草 俵 老^ろ 朶 菜 餅 臼 飾 松 椒 子 め 積 固 箸 煮 酒 蘇 服 竈 刷 曆 便

七 七 六 六 六 六 五 五 五 四 四 四 三 三 三 三 三 三 三 三 二 二 二 二

縫 織 鍬 山 仕 讀 書 掃 二 嫁 泣 笑 傀 獅 猿 萬 投 十六 繪 雙 歌 福 羽 羽 追 獨 手
初 初 始 始 始 初 初 初 日 君 初 初 師 舞 し 歲 扇 六 六 多 引 子 板 子 樂 毬
十六むさし

四 四 四 四 四 四 三 三 三 三 三 三 三 三 二 二 二 二 二 二 九 九 九 六 六 六 七

七種粥	粥柱	寢正月	鶯替	小松引	初寅	初卯	初藥師	初金毘羅	十日戎	寶惠籬	春場所	餅花	土龍打	網曳	松の内	松納	飾納	注連貰	左義長	鳥總松	松過	小豆粥	藪入	凍る	冴ゆる	三寒四溫
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

悴かむ	胼	鞍	霜焼	霰	風花	雪起し	雪	雪	雪見	雪搔	雪卸	雪踏	雪まろげ	雪合戦	雪礫	雪達磨	竹馬	スキ	雪車	雪沓	かんじき	しまき	凍死	雪眼	雪女郎	雪折	雪晴	
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

